

中国民居研究—客家围龍屋型民居の構成について

主査 片山 和俊*1

委員 茂木 計一郎*2, 尾登 誠一*3, 中山 淳*4, 稲葉 唯史*4, 木寺 安彦*5,
陸 元鼎*6, 黄 浩*7, 黄 漢民*8, 李 双龍*9

中国南部地域の福建・江西・広東の省境周辺に広がる客家土楼民居研究。福建省環形土楼が空間的に分かり易く有名だが、他の二省にも様々な類型の土楼民居がある。围龍屋型民居は広東省客家民居の典型である。民居の空間的な魅力や類型、土楼の内外で行われてきた生活と道具類に対する興味からはじめた研究である。それぞれの民居は遷移という壮大な流れを内包しており、そのメカニズムを探ることがもう一つのテーマとなった。最終的には三省に広がる遷移過程を捉えることを目指しており、そのためには各省にある典型的な民居類型を確認する必要がある。今回の研究対象はその一つであり、考察を通じて客家民居の広東省への広がりを明らかにしたい。

キーワード : 1) 中国民居, 2) 客家民居, 3) 広東民居, 4) 土楼民居, 5) 中庭 6) 天井,
7) 遷移, 8) 風水と住居 9) 围龍屋型民居 10) 華僑の故郷の一つ

RESEARCH OF THE CHINESE WEILONWU HOUSING STYLE

— Comparative Study Of The Kejia Housing Style In South China —

Ch. Kazutoshi Katayama

Mem. Keiichirou Mogi, Seiichi Onobori, Atsushi Nakayama, Tadashi Inaba, Yashuhiko Kidera

Lu Yuanding, Huang Hao, Huang Hanmin, and Li Shuanglong

This research focused on the *Kejia Weilonwu* housing style of the *Guandong* province in China. A design and hearing survey of the architecture, furniture and tools was done. Consequently, a comparative research with the *Kejia Tulou* housing style, found in the adjacent provinces of *Fujian* and *Jiangxi*, was carried on. Thus, the purpose now is to comprehend the people's migration process among the three provinces of *Guandong*, *Fujian*, and *Jiangxi*, and then improve our understanding about the architectural interrelationships between them.

はじめに

この報告は1985年度客家福建民居¹⁾、1995年度江西客家民居²⁾の継続研究である。各研究を包括するテーマは“中国南部地域における客家民居総合化の試み”にあるが、ここでは、その1つの柱として围龍屋型民居 (*weilonwu*) を中心に、合わせて広東省客家民居のについて報告する。

1. 客家民居について

1.1 客家とは

客家とは中華民族の主要な部分を構成する漢民族の一支系である。客家語を用い、黄河流域に歴史的な血縁と地縁をもち、共同の生活様式、風俗習慣、信仰と理念で結ばれている人間集団と言ってよいだろう(図 1-3)。秦漢以来先に南遷し宋代に戸籍ができた漢民族を主籍とし、後から到達した人たちが客籍人、客家人を客家と呼ぶと言われている。従って客家には、主籍が占めている平原の肥沃な土地を避け、さらに奥の僻地や山の中に住む特有な移住構造がある。

1.2 遷移について

歴史的に北から南への漢民族の遷移は、凡そ5回と言われている³⁾。客家の主な形成期は南宋時代で、完成期は明清時代である。遷移はいずれも中央王朝交代期に多く、異民族の侵入時に激しい。

第1期は、西晋末の内部抗争的な戦争と北方五民族の中原侵入による。遷移は古楚地区(*guchu*)⁴⁾が中心で、南下漢人と土着の人たちとの融合はうまく進んだと言われている。第2期は唐末から北宋滅亡まで。中原の人口が減少し、江西省の人口が増加したほどの遷移があった。特に唐末の黄巢の乱(*huangchaos*)⁵⁾時が激しい。第3期はモンゴルの侵入による南宋末期から元にかけてで、この地域一帯が戦場となり、三省の省境である南嶺山脈と武夷山脈に逃避が進み、その結果文化的特質が封印されたと言われている。第4期は明末期から清にかけてで、満州族の南下と開拓移民が奨励されたことによる。明代が比較的平和であったため、人口の急増と農耕地不足が起こり、四川への移住が奨励さ

*1 東京芸術大学 教授 *2 東京芸術大学 名誉教授 *3 東京芸術大学 教授 *4 東京芸術大学 非常勤講師 *5 建築写真家
*6 華南理工大学 教授 *7 中国伝統民居專業學術委員会 副主任 *8 福建省建築設計院 院長 *9 復旦大学新聞学院 助教授

れたのが開拓移民である。また客家は漢民族の末裔として異民族の清軍に抵抗したため、当地域自体が戦場と化し、様々な遷移が発生した。第5期は清末期。急激な人口増加による移住と海外への移住である。特に清末太平天国革命(taipingtianguo)⁶⁾の失敗後、清軍の殺戮対象となり、それを避けて東南アジアへの移住が進んだという(図1-1)。

以上から客家の大凡の形成は、戦乱時に逃避する遷移という外部要因と平和時に人口増加から移住するという内部要因が、一千数百年に亘って繰り返された結果とまとめることができる。その中に明清時代に江西へ福建・広東から再び移住した新老客の区別があるなど、客家の形成・発展には複雑な集散、流動、融合が見られ、その痕跡を辿ることは簡単ではない。

1.3 客家人の分布

現在6000万人とも言われる客家の居住地は、中国南部を中心に、広西、海南、台湾、香港、四川、湖南そして東南アジア各地に広がる。大凡の居住地は、二つの三角ゾーンとしてまとめることができる(図1-2)。広域ゾーンは、南は海南島三業市、北は四川広漢、東は台湾彰化の範囲、狭域ゾーンは福建、江西、広東三省の省境地域の純客家居住県市である。今回の研究対象地域は、狭域ゾーンに属す広東省東北部梅県地域にあり、客家文化の中心地区と見做される(図1-3)。

2. 広東省客家民居(図2-1)

2.1 広東省の客家民居の特徴と類型

今回の囲籠屋型民居は、広東省にあることと前述の狭域ゾーンにあることを重ねもっている。広東省には、17県市の純客家人居住地域と30数県市の混住地域がある。そして客家民居に三つの特徴的な地域がある。一つは龍南など江西省と空間的に近い省北部で、江西土囲と同じような大型の囲屋(weiwu)や欄楼(dialou)⁶⁾がある。二つは福建省と近い省東部で、円・方楼や研究対象の囲籠屋型民居が見られる。三つは、東シナ海に近い深圳周辺に見られる世居(shiju)という大型城壁式民居。つまり広東省の客家民居は、隣接省の強い影響とそこからの二次的な遷移、加えて自省の広府民居や先住の住居形式などの影響を受けて融合発展してきた多様な類型を見ることができる(図2-2)。

それは広東省の位置と形状にも要因が求められる。客家遷移・移住の大凡の流れから、中原からの三省への入口が江西省、迂回路が福建省であり、広東省は両省から遷移移入の受け皿にあたり、さらに海外への出口、中継基地に当たる。また広東省の形状が海を背にした弓状で、臨海部や海外の影響を受け易く、建築形態や装飾に西欧の擬似的な要素が強くと認められる。その結果、客家民居には、基本構造を持ちながら多様性に富んだ住居形式が生まれ、“客家人は土楼と囲屋に住むが、土楼と囲屋に住む人たちが客家人であるとは限らない”という複雑な状態を呈している。

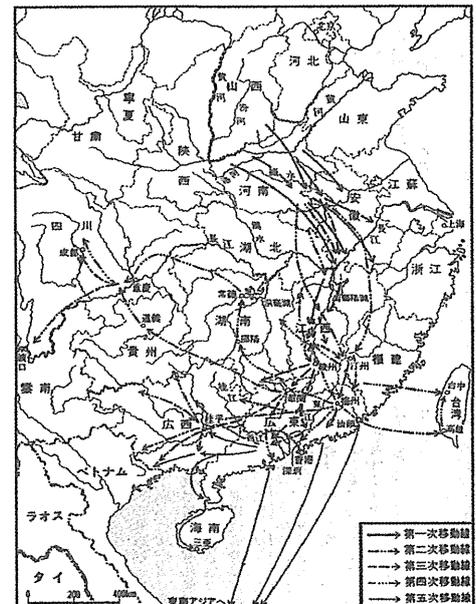


図1-1 客家の遷移の過程

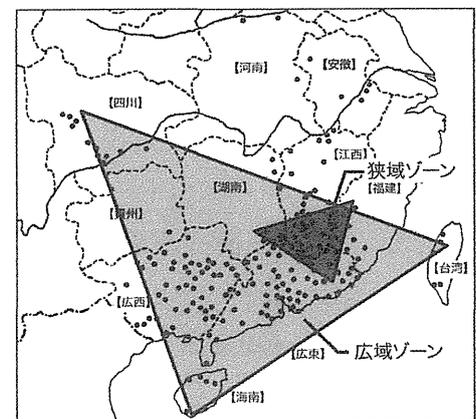


図1-2 客家の分布

従って分類は難しいが、広東客家民居形式を大凡分類すると

(1) 門堂屋(mentangwu)

下堂、中堂、上堂の三堂を中心軸に据えその両側に居住用の横屋を配した客家民居の最も基本的な形式。

(2) 杠屋(gangwu)

住棟間に天井を挟んだ民居で、大門が側面に夫々つく。平面形状が、こん棒に似ているので杠屋(並行屋)という。

(3) 方圍・八角圍

江西では圍子、広東北部では圍屋・欄楼と呼ばれ、広東北部南雄、始興や東南部惠州、深圳そして香港にも見られる形式。平面が正方形または矩形で、外周が比較的高く、防衛的な特性の強い形式。福建では各層が木造通廊式(tonglangshi)⁶⁾で各部屋が連なる形式だが、饒平には単元式(danyuanshi)⁶⁾の方圍(大夫第)もある。八角圍の事例は少ない。円圍に近いが、建造方法、実用上からも優位ではなく、恐らく風水上の判断によるものと思われる。

(4) 円圍・楕円圍

福建省に近い省東端地域にある。円圍には通廊式と単元式があるが、この地域には単元式が多い。円圍の住民は、

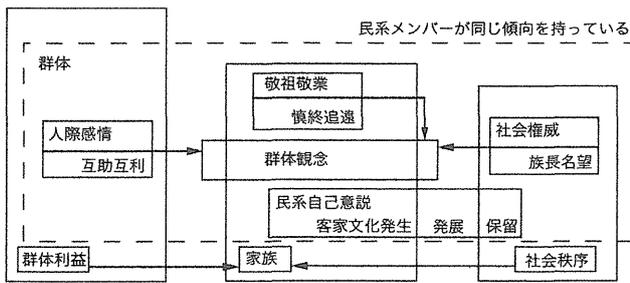


図1-3 家族を中心とする客家民系社会の構成形態

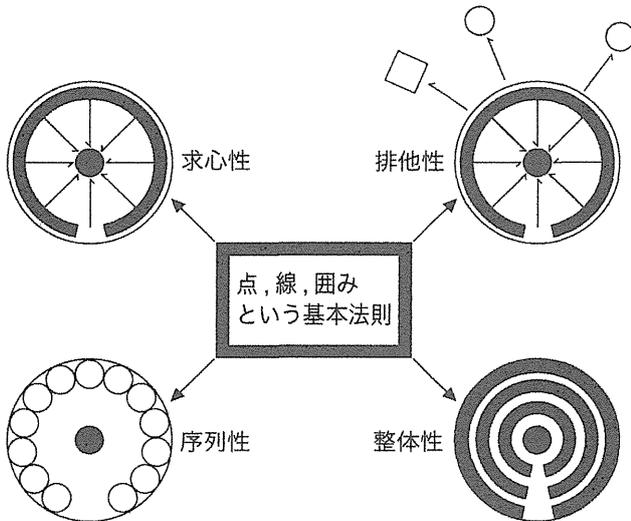


図2-2 客家民居と構成の基本

客家人のみならず潮州人や畚族人(shezure)¹⁰⁾もいて、文化の混在が見られる。楕円囲の事例は少ないが、平面は福建土楼よりも囲龍屋に近いと言われている。

(5) 半円囲

囲龍屋の平面が変形した形式であり、囲屋を半円環形に回したもの。福建との境界である省東北部興寧に見られる。半円囲の囲屋の外形と、興梅地区囲龍屋の後囲は似ている。傾斜地に建てられ、前中部が低く、後部が高い。半円楼は夫々独立していて閉鎖感はない。比較的新しい時代の建築と言われている。

(6) 囲龍屋

門堂屋平面を基本に囲龍屋あるいは枕屋(zhenwu)¹¹⁾を加えてできた民居形式で、広東東北部の典型的な形式で、その影響は広い。

(7) 世居

清時代以降に形成された、規模の大きい碉楼、圍楼をもつ城堡式民居形式。囲龍屋や方圍など客家民居と当地域の広府民居の融合して生まれた形式と考えられる。

(8) 圍村・その他

外周部を城壁等で囲んだ集落。その他に西欧の影響を受

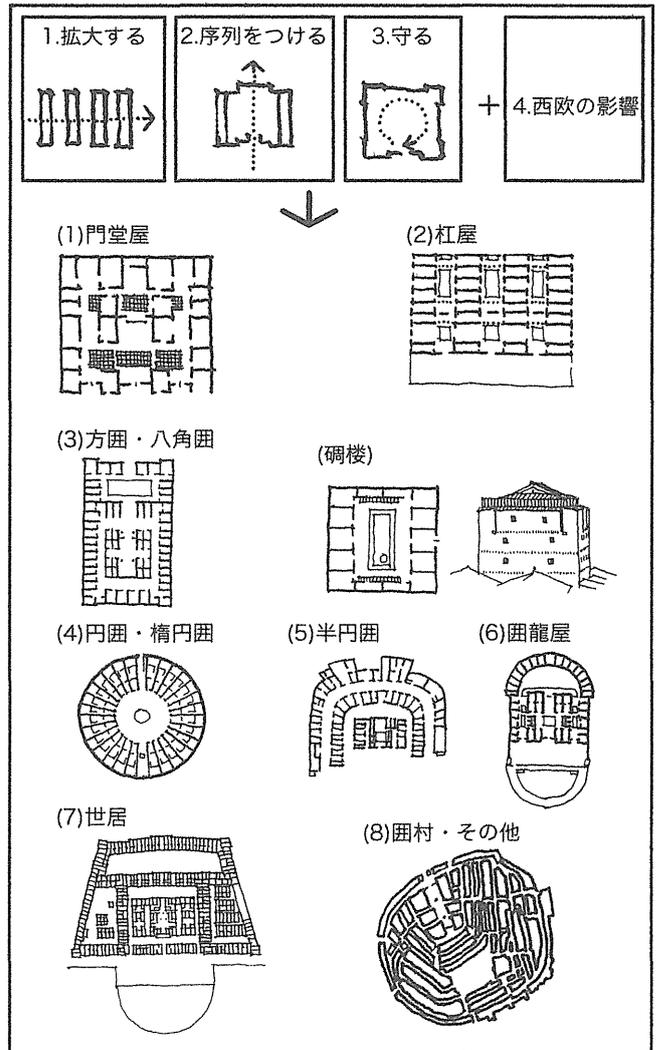


図2-1 広東客家民居の類型

けた様式や装飾を施したものが多く見られるが、平面は中国民居の伝統に近い。

3 圍龍屋型民居について(図3-1, 3-2, 3-6)

今回の研究対象である圍龍屋型民居は、広東省東北部梅州市に属する梅県、興寧など純客家県に発達した独特な民居であり、さらに東江流域や環珠江口の深圳地区などにも見られる形式である。その発生時期は、遷移第3期にあたり、江西南端や福建西端から徐々に広東東部興梅地区に客家人が移ってきたと思われる。圍龍屋の最も古い例としては宋末の蔡蒙吉故居があり、元代の例としては興寧東升圍が上げられる。

類推として、中原の住居形式を基本とし時代と場所を変異したものと考えられるが、圍龍屋の特徴は堂屋を中心に、その前部に禾坪(heping)¹²⁾という前庭と半円形の月池(yuechi)¹³⁾をもち、後部に半円形の花胎(huatai)という庭とそれを囲む圍屋—圍龍屋をもつ堂横屋構成にある。堂屋は、正門から進んで、二堂(一天井)あるいは三堂(二天井)が軸線上奥に続き、堂屋の両側に对象的に横屋が広がる。横屋は二横、四横、六横、そして十横までであるという。

このような堂屋と横屋の後面に半円形の囲龍屋が1~5重に囲む。これは、同一祖先とその子孫が繁栄した結果であり、横屋と囲龍屋の増加によって規模拡大要請に応えられる形式である。

上堂は、先祖を祀る堂であり、中堂は議事を行う堂であり、下堂は玄関の機能を果たす堂である。半円形の囲龍屋と囲龍屋に囲まれた花胎は、同じ位置で横屋とつながり、後部が持ち上がった勾配で構成されている。囲屋の各房間は居室で、形状が一部曲線をもつ台形で、俗称として斧頭間(futoujian)¹⁵⁾と呼ばれている。囲屋の龍庁は家族用として使われる。一部の囲龍屋には、防御のために外側の横屋の前後に、横屋より1層高い礮楼を建てた例があり、四角楼あるいは礮楼をもつ囲龍屋と呼ばれている。

囲龍屋が多く建てられたのは山地であり、平野から山地にかかる際に建てられている。前方が低く後部の囲龍屋が持ち上がった断面と、中心の堂屋が高く、両側の横屋が低い前面からの立面によって、背景の山と一体となった風景的な建築を現出させている(図3-3)。

そして囲龍屋型民居は必ず背後に山や森、緑を背負い、他の民居に比較して周囲の自然環境との関係がよく分かる形式である(図3-5)。この形式は半円形の囲屋をもつ住居と解説されているが、実際に訪れてみると、囲龍は民居の背後に控える山自体のように見える。山という龍に抱かれ守られた住居であり、そこに風水思想が作り出した環境と民居の一体的な関係、その典型を見ることができる。方位よりも、背後に山を配することが重要であり、生気や陽気が充滿した山という龍に抱かれ、その気があふれ出る点穴、穴に民居の光庭が置かれ、安定した内部空間が築かれるという基本構成が強く感じられる。囲龍屋が生まれた要因と特徴には諸説あるが、凡そ下記の項目にまとめられる(図3-4)。

一つは、囲龍屋を山に寄って建てることによって、その分前面に広がる農地や耕地を有効に使えるようになること。類推を逞しくすれば、逆に山際に建てた堂屋式民居に居住者が増えて増築する必要が生じ、山に登る囲龍屋が生み出されたのかも知れない。

二つは、傾斜地際に建築する場合に起きる排水と湿気を解決できること。背後の山に点在する墓地にも同じ配慮がされており、傾斜地に建てる場合、半円形に地面と接地させ、なおかつ中心部を高くすることは、傾斜地上部からの排水を逃がす優れた方法と考えられる。

三つは、半円形の堅牢な囲屋は、山崩れや洪水の防止に役にたつこと。前項に近いことだが、背後の山がかなり急勾配の事例があり、土砂崩れ対策から勾配をもった建築で押さえる方法は有効であったと考えられる。

四つは、裏側からの寒風防御に効果的であったこと。当地域は緯度が低く亜熱帯に属するが、奥深い山地にあり、気候的に寒冷な季節風があると思われる。

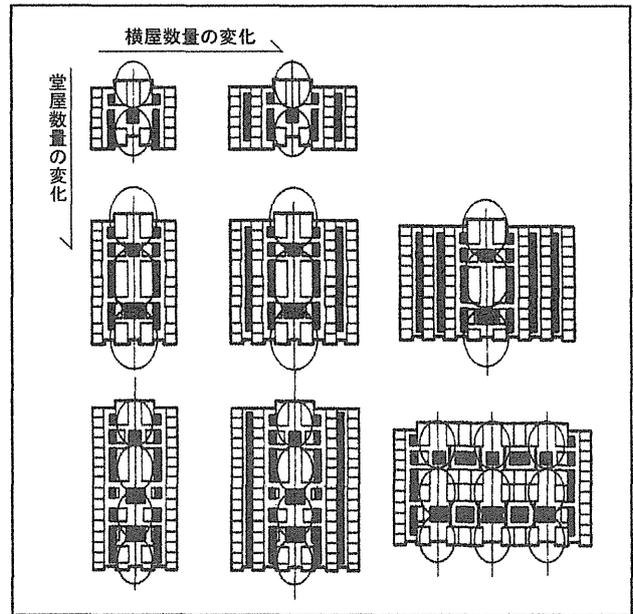


図3-1 門堂屋の基本構成

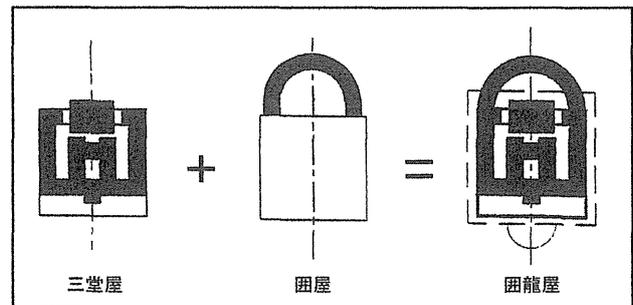


図3-2 三堂屋と圍龍屋の比較

五つに、背後の山と堅固な圍龍屋により防犯防御に役立つこと。防御の必要性は、他省や他形式民居に比較して強くないが、背後に山を背負い、両側を横屋で塞ぐことによって、前面の1面のみ守ればよいことになる。

六つに、一般的に楼は建て始める時は小さく家族の人数が増えて拡大していくことが多い。この形式は家族の繁栄と収容拡大に適合した住居形式である。

七つに、圍龍屋の平面は円形と四角形からなり、円は天を四角形は地を暗示し、風水に適合した形式であること(図3-2)。

八つに、圍龍屋は人体の体型と符合し、圍龍を肩、横屋を腕とし、肩と腕で包込んで三堂を守り、一族や家族の祖宗や親近感を表現する形式とも言われている。と同時に前面から人を迎え入れる形を示している。

4. 三省と客家民居類型(図4-1, 4-2, 4-3)

客家民居、土楼型住居は、主として三省が接する狭域三角ゾーンに分布している。その住居形式は、前項の遷移と移住によって生み出された住居形式で、共通した構成方法を有しているが、それぞれの省、地域によって異なった類

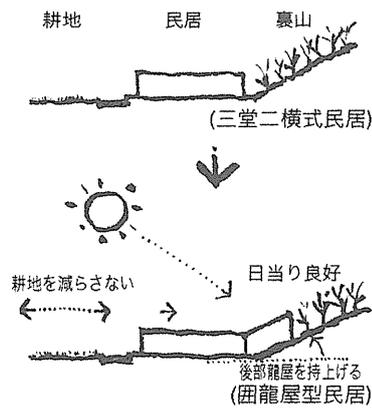


図3-3 困龍屋型民居の形成

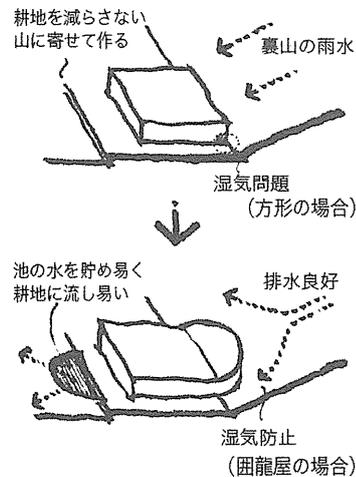


図3-4 困龍屋型民居の立地と地形

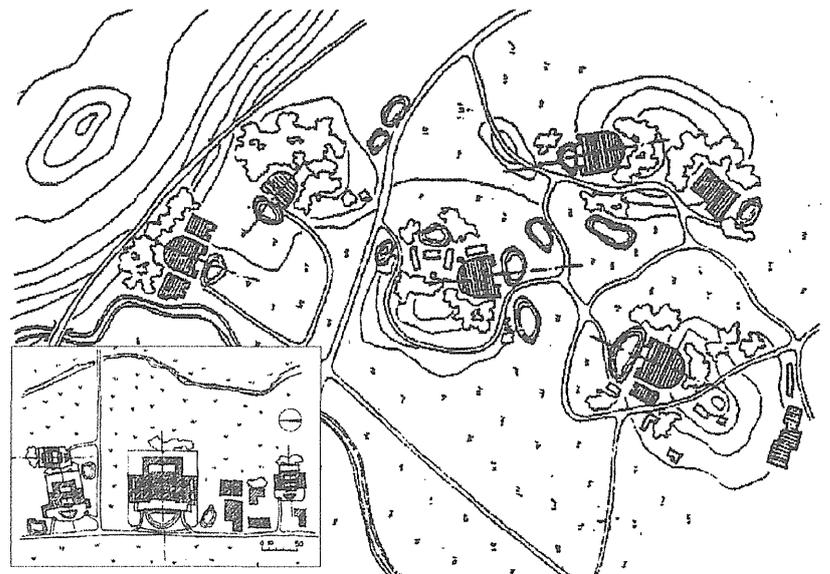


図3-5 客家民居の配置例

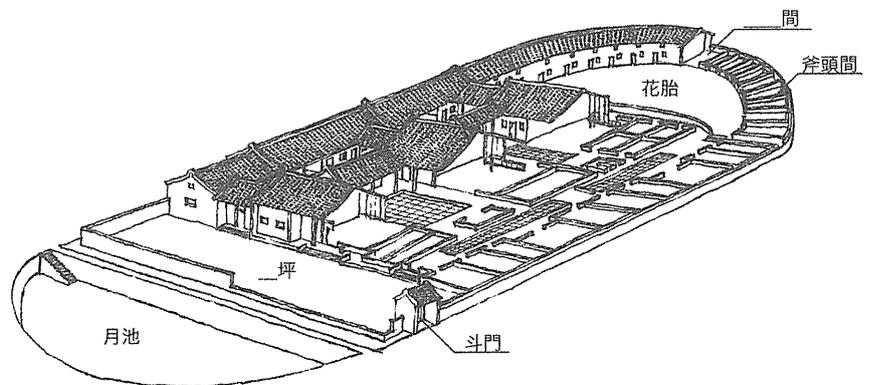


図3-6 困龍屋型民居の構成要素

型と名称を有している。

江西省は、他の2省に比べ類型・事例とも少ないが、比較的早い時期に中原からの移住があった地域である。土圍と呼ばれる城塞的な外観に特徴がある。贛江(ganjiang)が南北に走り中原に近いことと、比較的平地で移動しやすい環境にあり、戦闘に晒さらされやすいところから生まれた“堅固な守り”の形式と考えられる。

また福建省は円・方形土楼で有名だが、中原の形式を残したと言われる群体形式の事例もある。けれども円・方形土楼が数として圧倒的に多い。山岳的で閉鎖的な環境の中で、独自の発展をとげて生み出されたと考えるのが自然である。

そして今回の研究対象地域がある広東省には、様々な類型が離れてあり、他の2省のようにまとめることは難しい。遷移の過程から考えると、研究対象である東北端の困龍屋型や北部の方圍は、隣接省と時期と形式を同じくし、南部の深圳廻りの民居の形成は比較的新しい時代と考えられる。困龍屋型民居は、広東省の代表的な民居形式ではあるが、省の中では端部の地域的なものに過ぎない。けれどもそこから深圳への二次的な遷移¹⁶⁾と、北部の方圍からの遷移、

それに現地の広府民居の影響が加わって生まれたのが深圳廻りの大規模な城堡式民居形式と考えると、困龍屋型民居は広東客家民居を生み出した原型の1つと考えてよいのではないだろうか。

5. 民居事例

ここでは困龍屋型民居を中心に、実測調査をした民居を取り上げ、広東省客家民居の類型に沿って説明を進めていきたい。

(困龍屋型)

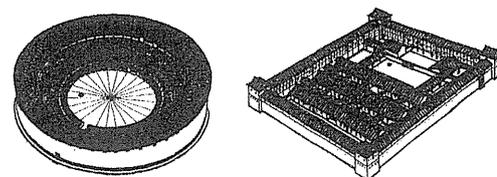
(1) 梅県丙村仁厚温公祠(図5-2)

仁厚温公祠は、梅県丙村鎮豊村にあり、温氏12世祖温会川によって建てられ、既に400年余りの歴史をもつ。世祖の生まれは明嘉清19年(1540年)享年70歳。公祠は三堂八横、三圍の困龍屋であり、その中心の三堂は明代の建築で、次第順次建て増され現在の姿になった。正面に禾坪と斗門(doumen)¹⁷⁾、半月形の池がある。左右両側にそれぞれ四横屋をもち、それぞれの横屋は3段に分かれ、2本の路地で連絡され行き来できる。

この民居の周囲には増築・新築された建物が多くなり、

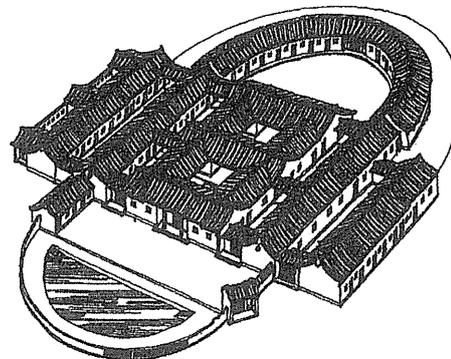
	江西省	福建省	広東省
典型平面			
名称	圍子	五鳳樓	土樓(円・方)
自然気候地形	僻地・平坦な農地 春夏 内陸性、蒸し暑い 冬 寒冷	山地 斜面地 湿熱多雨 台風あり 背山面水	山地 盆地 谷間 湿熱多雨 台風あり 背山面水
集合形態	独立、散在する圍子	倚山傍水 散在する 群体住居 五鳳樓	近接する 円形、方形土樓
発生の由来	塙堡 客家が中原より持ちこ んだ住居形式	中原よりの形式を受け た風水的展開	山寮 客家が古くからある土 着の形式を採用、展開
平面形式	中央に堂屋があり、両横 に宅屋がのびる 二進二横、三進三横 工字形、王字形平面 周辺を房屋、厚壁が囲む 四隅に 棧、砲台あり	中央に堂屋、左右に横屋 中軸対称 全面に禾坪、池塘 背後に農圃などあり 斜面にもたれ前に水あり	中央に堂屋あり、居室 が堂を回って円形、方 形に囲む 多層の居室が高く、厚 い壁に寄り添う
住居形態	広く平面的に広がる圍子 が多い 中心家族並立 囲いの中の変化の自由あり、 改変へのこだわり少ない	堂屋は手前は低く奥ほど 高くなる 中心家族制、その支配 感序列性が強調される	円形、方形土樓の隣合 う組み合わせもある 何れも周辺に連続する 房屋は住居の平等性あり 家長制希薄に見える
材料と構造	石基礎 外壁 土厚壁、石壁 室内木造 一層 低層 四隅は高く	石基礎 外壁 生土壁 室内木造 前面一層 後部多層	石基礎 外壁 生土壁 内部木構造 3~4層 堂屋は一層
防衛性	平城 水濠を廻らす 僻地 治安悪く争い多し 閉鎖的 防衛性高い	土壁を廻らすも半閉鎖 周辺への眺望を持つ	土樓、山城籠城型 重厚な外壁に抗戦装置 などあり 閉鎖的 防衛性
外観	堅牢、重厚、単調	変化ある存在感	堅牢、実朴、重厚 重層感あり

図4-1 三省における客家民居の特性比較



福建省 環形土樓型民居

江西省 土圍型民居



広東省 圓龍屋型民居

図4-2 三省客家民居典型タイプの比較

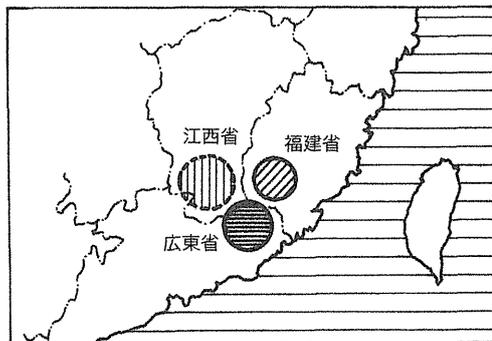


図4-3 客家土樓民居と調査地域

外側からの風格が失われつつある。内部に住んでいる家族が少なく、外周部の新しい建物に移り住んでいる人たちが多く見受けられた。

(2) 梅県白隸華居(図5-1)

丘氏隸華居は、梅県白宮鎮富良美村にある。この村は広がりのある地形と自然に恵まれた村であり、村民の姓に丘が多い。祖先は福建上坑から広東梅県に移住してきてから、すでに100年あまりが経つ。隸華居が建てられたのは1918年、占有面積は5200平方M、建築面積2270平方M。東北向き。二堂四横一圍龍の形式で、前面にひろばと月池をもち、格式の高い圍龍屋である。ひろばの東側には斗門があり、西側に2間の雑物庫、圍屋東側に別棟の家畜小屋と雑物庫をもつ。特別なところは、圍龍が外側の横屋と連続していること、木架構であること、封櫃板・屏風などの彫刻彩色絵の題材が幅広く内容が豊かであること。絵画の中に飛行船や汽船の類が描かれ、年款が描かれている。保存状態はよいが、現在居住は1家族のみ。隣接して1934年に建てられた西歐的な様式を取り入れた聯芳楼がある。

(3) 梅県南口潘氏德馨堂(図5-3)

潘氏德馨堂は、梅県南口鎮僑郷村にある。14世印尼華

僑潘立齋が1905年に建てはじめたもので、外側の圍龍屋が建てられたのは1917年と言われている。祖先は贛南から花県を経て、ここに来たという。現在4世帯10人が住んでいる。堂は南面し、二堂四横二圍龍の建築で、部屋の計画は通廊式の構成で、広東の伝統にのっとった典型的な圍屋形式の例である。地形に合わせて建てられ、前面低く後面が高く、自然環境とよく調和している。周囲の地形を含めた大きな断面に、圍龍屋の生活が表現されている。裏山から上水を引き、前面に田畑が広がる。裏山にある墓も住まいと同じような構成で地形と接しており、この形が斜面と接する場合の基本形に見える。前面に禾坪と月池をもつ。

(4) 興寧劉氏大劉屋

劉氏大劉屋は、興寧市寧新鎮黃嶺村にある。劉氏の先祖は元々江西瑞金で、後に福建長汀に移住。5世祖の時に大埔百侯、6世祖時に大埔湖寮に移り、13世祖愛泉公によって興寧に建てられたのが大劉屋のはじまりである。公は、福建漳州で喫煙館を開き成功して建築資金を得たという。言い伝えによれば大劉屋は明代後期の建築であり、既に430年の歴史が経っているとされている。

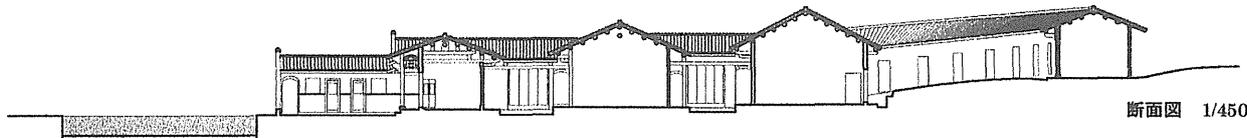
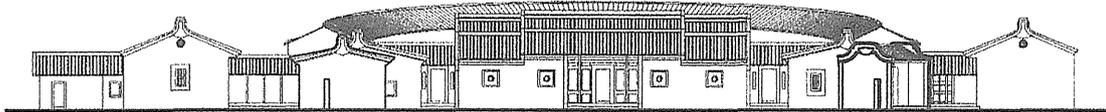
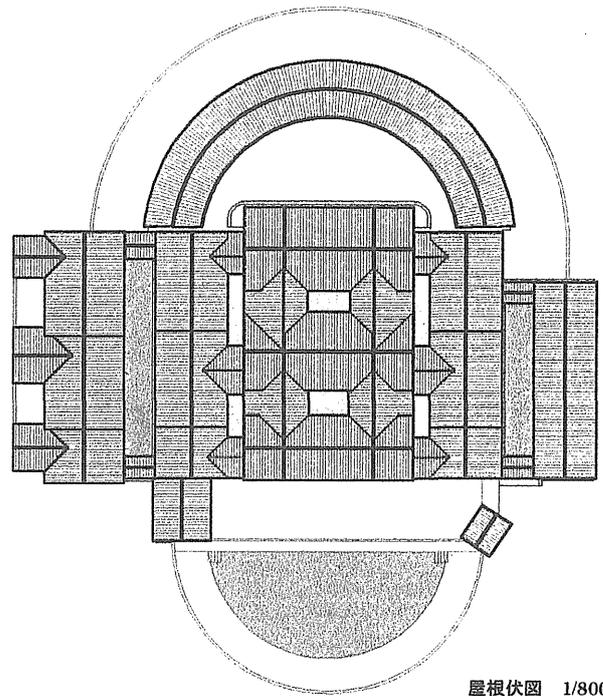
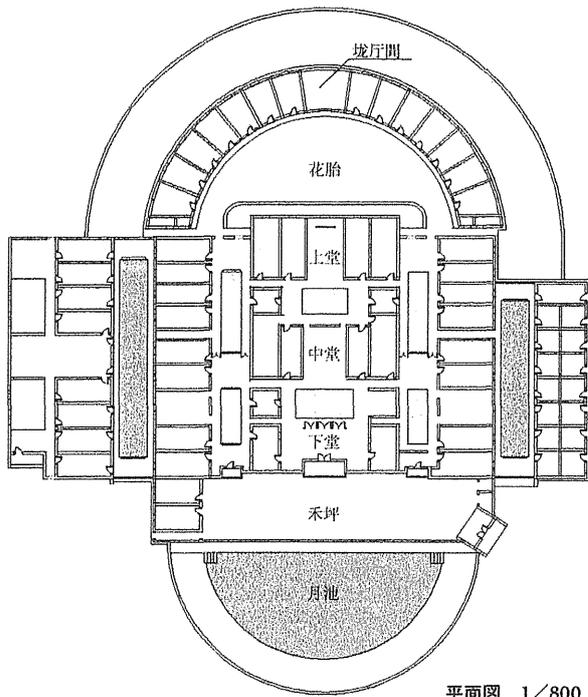


図 5-1 梅県白宮岡氏諫華居

大劉屋は南向きで、三堂六横三囲龍をもつ典型的な囲龍屋である。門前に禾坪と月池を、後部に傾斜した半月形の花胎をもつ。建築年代は比較的早く、囲屋は1層で梁柱と門框など全てが簡素であり、原木のままに使われ彫刻が少ない。家屋は土レンガを積み上げた壁で作られ、堂屋の山型頂部は竹を編み泥を塗り込めて築造している。このように低く古朴で、全てを木と土で作った明代囲龍屋で現在残っているのは、この一例のみと思われる。この屋の幅は約80M、深さは約110M、建築面積は約9000平方Mに近い。

(5) 興寧羅氏東升圍

羅氏東升圍は興寧市城東寧新鎮にあり、言い伝えによれば羅氏は、宋末元初めに梅県からこの地に移ってきたという。東升圍が建てられたのは元代である。この付近には、いろいろな時期に建てられた大小8軒の羅氏の囲龍屋があり、現在80戸2000人余りの人たちが住んでいる。東升圍は、目下興寧地区の最も古い囲龍屋であり、「九庁十八井」として知られている。中心部分は三堂屋であり、横幅の広さは27.9M、奥行きは31.4Mの北向きで、少し南北に長く東西に短い正方形をしている。上、中、下堂が同じ広さで構成されている。基本的な構造は土を固めたもので、

基礎は灰土に卵石を積み、窓棧を杉材で作られ、花柄模様を彫った屏風を置き荘重な感じを受ける。堂屋後部には、半月形の卵石張りの傾斜した花胎があり、前面にはひろば禾坪と扁平な半月形の池をもつ。東側の斗門から出入りする囲龍屋の典型的な形式を備えている。

中心の三堂部分は、大小47室の部屋がある。中心部分から周囲に増築され、堂屋の部分が元代始めに、順次建て増されて三堂二横一囲龍屋が形成された。横屋が前に張り出した禾坪と半円形の大きな月池のある整然とした囲龍屋となった。明清から民国時代にかけて羅氏一族の居住者が増え、第2横屋の外側にさらに横屋が建てられ32間の囲龍屋が増えた。第3、第4圈の囲龍屋を拡大する時には公用地の制限を受けて横屋の増築ができず完全な囲龍にはならなかった。現在約10家族、60人程度が居住。

(半円楼)

(6) 大埔桃源郭氏敦裕堂 (図 5-4)

郭氏敦裕堂は大埔県桃源鎮新東村にある。郭氏の祖先は福建上坑から楓朗大埔に移り8世祖の時に桃源に来て、10世祖贊全公が敦裕堂を建てた。郭氏祖祠は現在23世を数え、堂が出来てから13代の歴史をもち約260年を

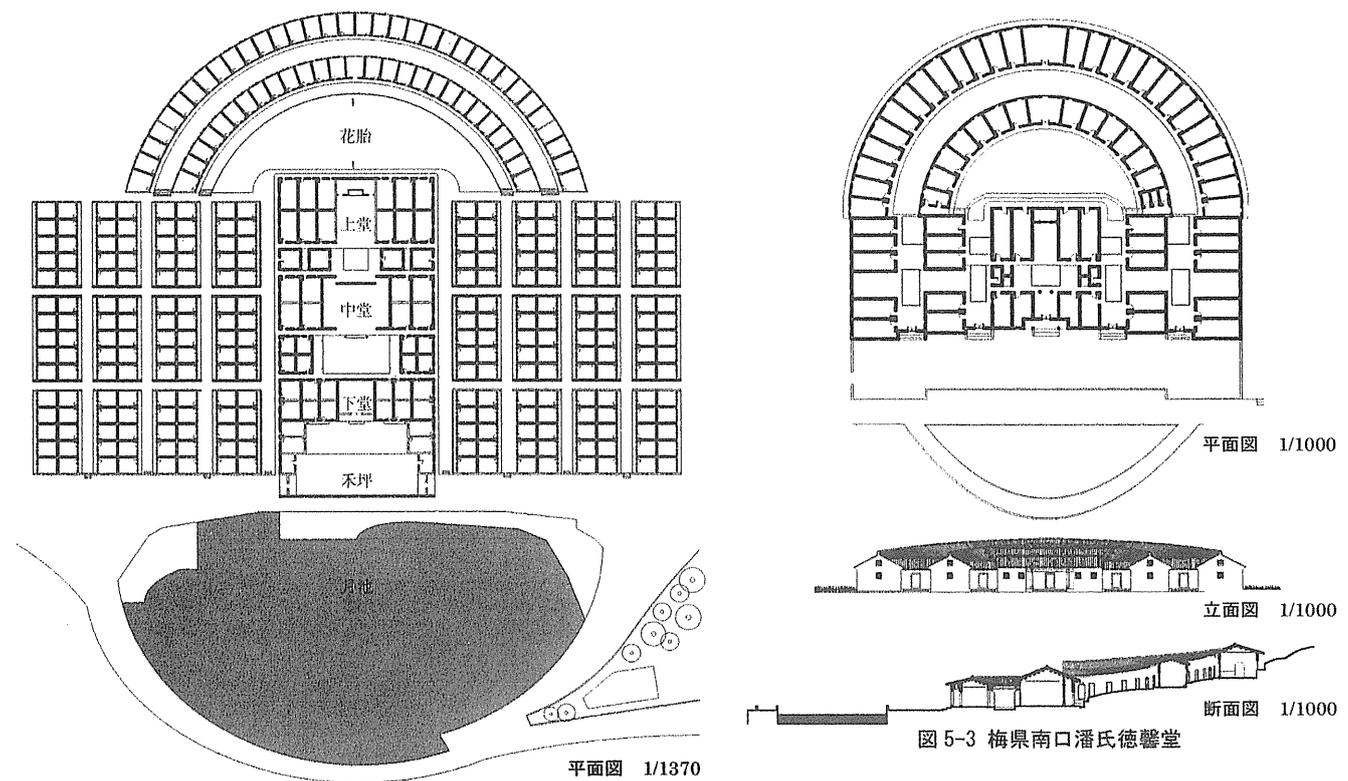


図 5-3 梅県南口潘氏德馨堂

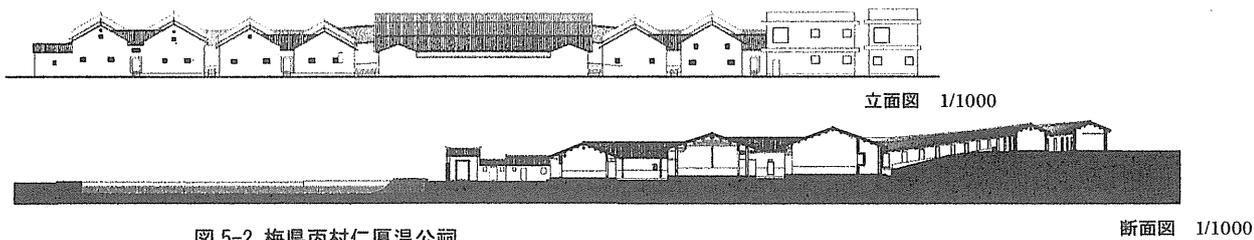


図 5-2 梅県丙村仁厚温公祠

る。敦裕堂は南面し、中間に二堂二横の宗祠建築をもち、外側を二重の半月楼が巡っている。内側の半月は16世紀、外側は17世紀の建設。堂屋後ろに花胎をもち、囲屋の中間に龍庁がある。囲屋は單元房の構成である。外側の單元房は大きく、“倚安廬”“有恒居”などの名前がついている。門を入れて四庁四房一天井の構成は、広く快適である。囲楼の東西直径は約87M、南北は約47.5Mである。この形式は、片方を塞げば逃げられない構造で泥棒対策に優れている。すぐ南側に五華・饒平を経て五華に移ってきた半月楼の謝氏德馨堂がある。

(円囲)

(7) 饒平上善許氏潮源楼 (図 5-5)

潮源楼は、饒平県上善鎮二善村にあり、建てられたのは1955年で、饒平で最も新しい円形土楼である。

楼は東向きで3層、毎層36間の構成。奥行きは13.3M、間口は内側2.8M、外側5Mの扇状の平面で、階段をそれぞれの房にもつ。外壁は卵石基礎の上に版築造の壁を積み、厚さは1.2M。各階の住戸隔壁は土レンガ壁で、各層毎に瓦の屋根底を廻している。楼の内部は卵石敷き詰めで、円形の井戸を1箇所もつ。土楼正面大門前に小さな半月形の

池をもつ。土楼の外側には更に内側1層、外側2層の單元房の住戸が環形に巡る。土楼の半径は約30M。

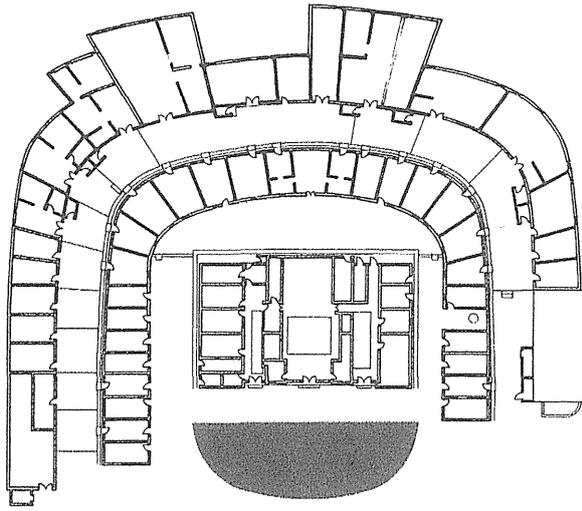
円形土楼は福建のものと思われているが、省を越えたこのあたりや江西にも数は少ないが見られ、許氏は福建漳州から来たと言われている。この楼には現在でもかなり多くの人たちが住んでおり、生き生きとした生活感が感じられた。

(8) 饒平上善許氏啓明楼

許氏啓明楼は饒平県上善鎮二善村にあり、潮源楼に近い。許氏の原居は漳州烏坪であり、後に福建寧化石壁に移る。元代に上饒寮背に移り、上善を経由して最後に二善に移る。啓明楼が建てられたのは1924年。楼は東向きで3層の円形土楼。毎層32間で、單元房の構成で、上庁は木の入口をもつ1間房で閣楼を備え、壁際の本製階段によって2、3階に続く。門庁は台所で上庁は食堂と居間で、個室をもつ。1住戸は大凡60平方M。

楼の外壁は卵石基礎と版築造。各隔て壁は土レンガ造。土楼中庭床に卵石張り、円形井戸が1カ所ある。正門入口前に半月形の小さな池がある。土楼の半径は約26M。

(方圍)



平面図 1/840

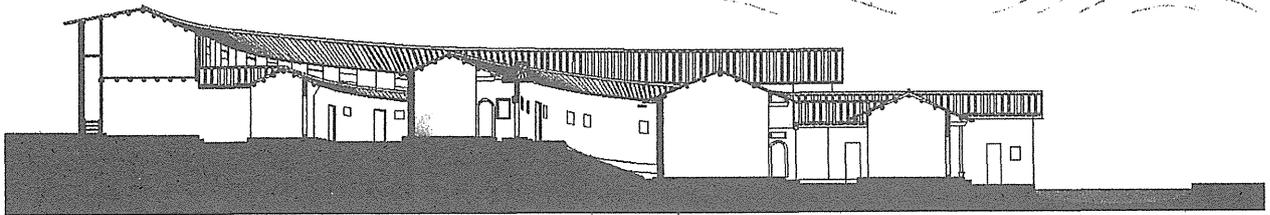
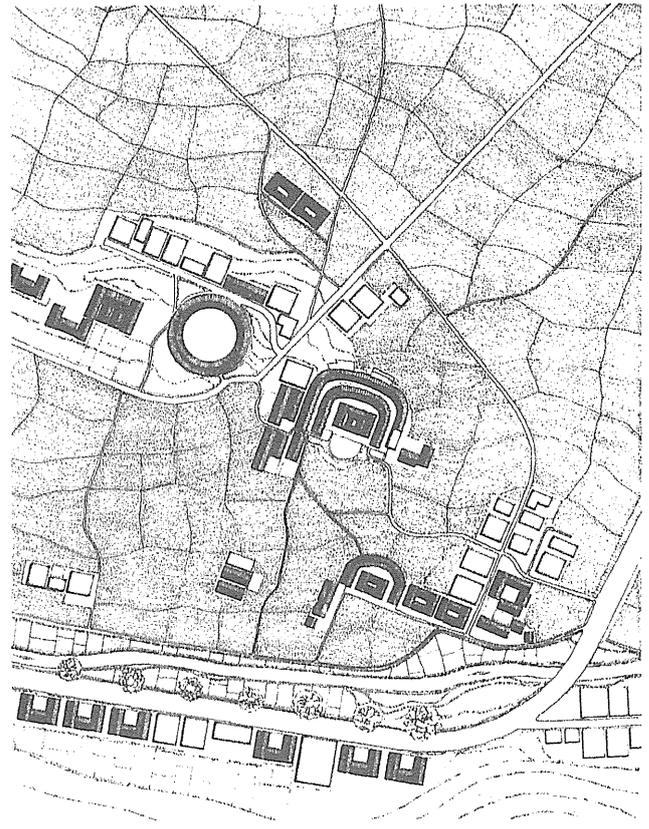


図 5-4 大埔桃源郭氏敦裕堂

断面図 1/370

(9) 大埔湖寮藍氏泰安楼

藍氏泰安楼は、大埔県湖寮鎮龍岩村にある。言い伝えによると湖寮藍氏は、南宋時代に福建龍海から移住してきて、現在 35 世、約 700 年余りの歴史をもつ。泰安楼は、20 世少桓公 (1714~1774) によって、清乾隆年間に建てられた。言い伝えによると、公は福建漳州で烟行(yanhang)¹⁸⁾で成功し乾隆 3 年 (1738 年) に泰安楼を建て始めたという。

泰安楼は北向き、幅は 52M で奥行き 49M。規模は約 2 500 平方M。正門の装飾は牌坊式門楼(paigangshimenlou)¹⁹⁾で、堅牢で美しい外観を有している。前面は矩形だが、背面部分に弧形の平面をもつ。囲楼中間に二堂二横の祖祠がある。楼の四周外壁は、厚さ 0.8M で“石楼”と俗称されている。

きちっと整った 3 層の通廊式構成で(内壁は土レンガ造)、四隅に木製階段をもつ。2、3 層の内側の回廊は 1M 余りの幅があり、全楼を巡って出し桁の庇がついている。囲楼東西はそれぞれ 9 間で、南北は 16 間(含む門楼)、毎層 50 間の構成。現在まで保存状態がよく、居住者は少ないが生活感もある。泰安楼の藍氏は、自らの祖先を畚族としてい

るが、この楼の形式、言葉、生活習慣から、客家民居系と融合したものと考えられる。

(10) 五華錫坑李氏聯慶楼(図 5-6)

李氏聯慶楼は、五華県錫坑鎮老楼村にある。李氏は宋代に福建上坑に入り、その後清流県四保里上寮に移る。更に五華紫金山、水塞茶李堂に移り、五華に入った先祖を 1 世祖とする。一時掲西に移ったが、4 世祖時に五華錫坑に戻りその後村に分居した。聯慶楼はマカオ香港建築界の巨商李浩が建てたもので、清光緒 8 年 (1882 年) に完成し、子息のサッカー王李惠堂故居である。李惠堂 (1905~1979 年) はサッカーの普及に尽くし、その足跡はアジア、ヨーロッパ、オセアニア各地におよぶ。

聯慶楼は客家地区に見られる三堂二横、四隅に 4 層の碣楼をもつ建築に特徴がある。楼自体は 2 層で、2 階には木構造の回廊が巡っている。門の前には禾坪と月池があり、禾坪の両側に斗門がある。軒庇の出た瓦屋根をもつ。正面の柱は八角の梅花をあしらった石柱。左右横屋の 1 階は円形の石柱で、2 階には木柱が用いられている。正門、側門、転頭門には楷書の門題刻が掲げられている。上中下庁と左右横屋に置かれた屏風、梁架構などに金色の木彫による工

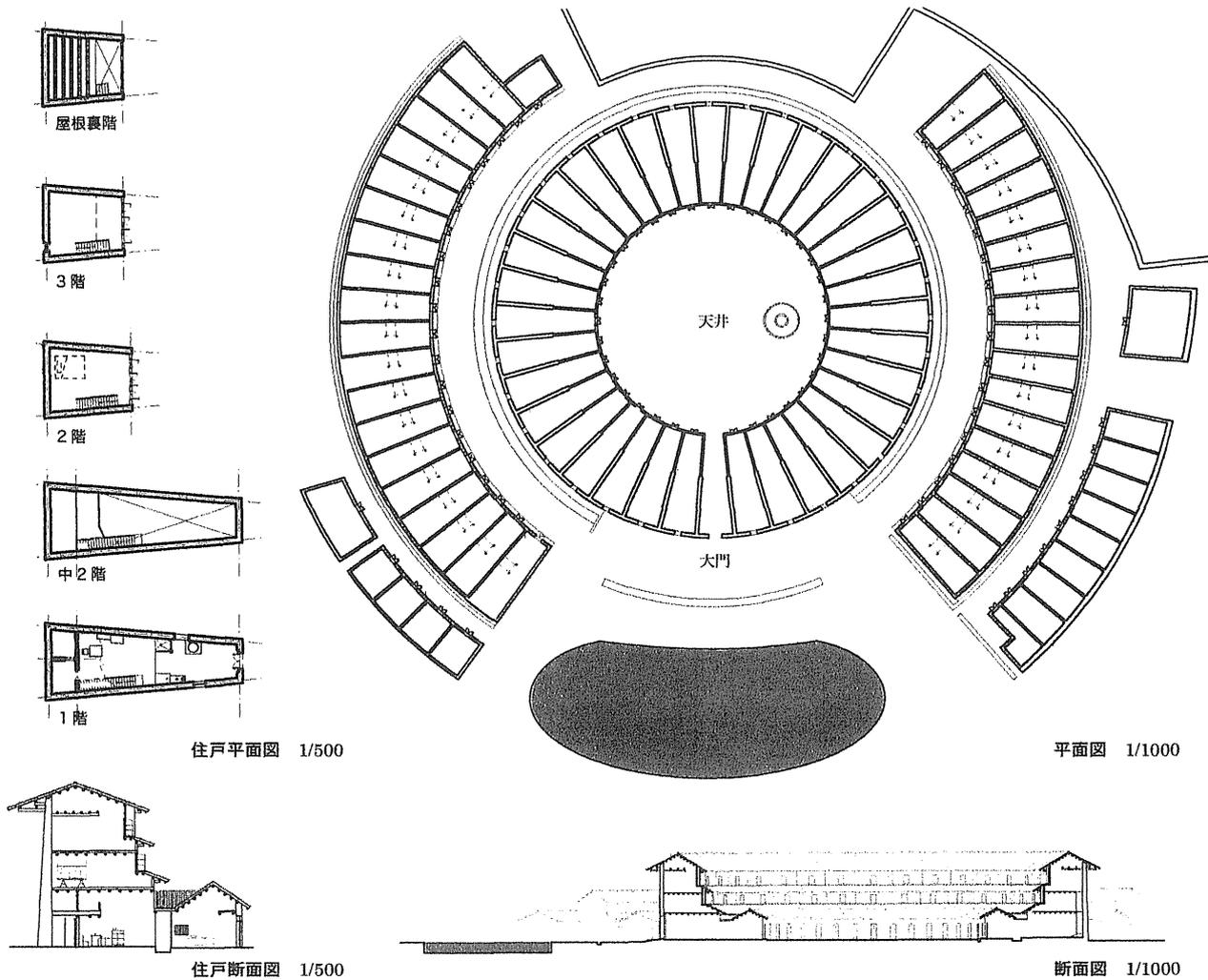


図 5-5 鏡平上善許氏潮源樓

芸的な装飾が施され、獅子、鳳、亀、花草、人物故事などが描かれている。聯慶樓の占有面積は約 4400 平方M、建築面積は約 3500 平方M。1994 年 9 月に、五華県人民政府は聯慶樓を県レベルの文物保存單位に認定したとあるが、実際には何も行われずかなり痛んでいる状態にあった。

(方圓。世居)

(11) 深圳坪山曾氏大万世居(図 5-7)

曾氏大万世居は、深圳市龍岩区坪山鎮大万村にある。曾氏は春秋魯国の孔子を伝える儒家の 1 人の曾参を祖先とすることで知られている。先祖は東漢に江西蘆陵、宋の政和年間に福建寧化に移り、宋元には潮州府海陽県に住む。明洪武年間に五華県長東に、康熙年間に深圳坪山に居を構え、77 世祖端義公が乾隆 56 年 (1791 年) に大万世居を築いた。

大万世居は、東向きの三堂二横、二枕杠、内外に二圍樓と八欄樓、一望樓をもつ大型の客家民居である。前面に禾坪と月池をもち、占有面積 22680 平方M、建築占有面積約 15000 平方Mである。平面はほぼ矩形で、背面が少し弓状に張り出している。3 つの大門をもち、正門は牌坊式の樓門で、“大万世居”“乾隆五十六年吉旦”という門額が

ある。

大万世居は三堂の端義公祠を中軸にして、内圍矩形 2 層の欄樓と望樓を第 1 段階とした。囲の中軸を守って建てた二横屋、内圍後部と外圍屋が第 2 段階、それらの間に天街が通り路地が通る。内部の建物と路地が整然と通り完成された構成を有している。

端義公祠の梁には彫刻と彩色絵がなされ、動物、花鳥の図案、細かい木刻細工などが生き生きと表現され、客家民居の中でもあまり見られない精巧さを見せている。また祠堂の中にかかった 10 数点の堂聯(tanglian)²⁰は文化的に高い内容を備え、客家人のルーツを探る気持ち、祖先を敬い宗族を大事にすること、忠勤に励むこと、仁愛を尊ぶことなど客家の文化的な伝統の反映が見られる。

大万世居は、大規模で建築的な完成度も高い建物だが、人々の暮らし方が往時と合っていない印象を受けた。世居内には小店舗を営む 1 家族のみ住んでいるだけで、中国の各地から深圳に来た出稼ぎ労働者たちの仮設住居と化しており、世居内側が雑然としており、中国経済発展の裏側を見るような光景であった

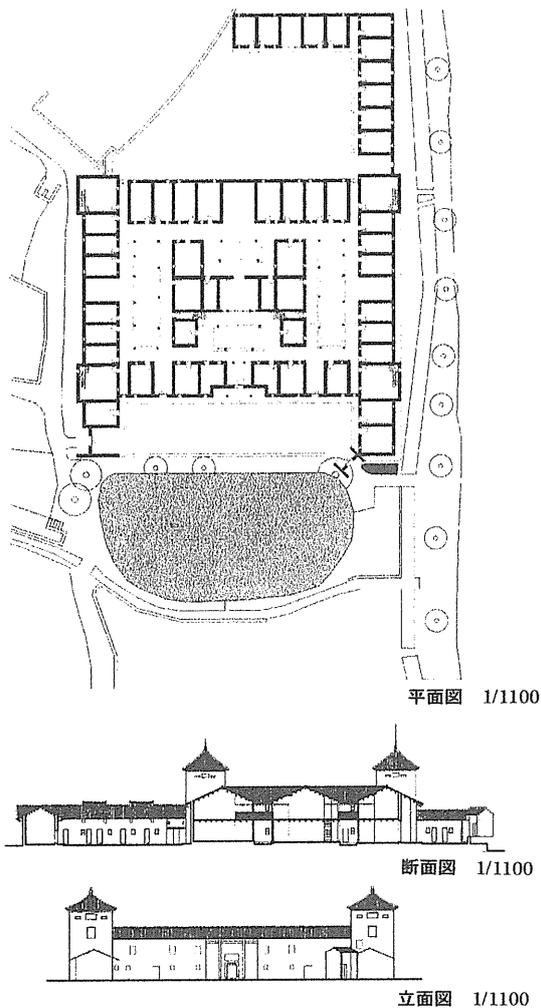


図 5-6 五華錫抗李氏聯慶樓

6. 家具事例

客家土楼民居の調度の種類は、最小限度の必要性からかその数は極めて少なく簡素である。家具類は、共用のある祖堂の装飾をほどこされた供卓(gongzhuo)²¹⁾をのぞけば、個人の住居の生活に必要な最小限度の機能をもつてつくられている。臥室は総じて寝室として使用され、床と呼ばれるベッドが狭い空間を占め、これを中心に箱桌(xiangzhuo)²²⁾などが置かれる。一方、自然の中で生きるために考えられた生産に関わる民具は、家具調度に較べてその種類も多い。それは特に農具や厨房の道具として作られ、素材は木のみならず、竹、土、レンガ、石など多岐にわたる。特に農具は、自然の中で耕作し、田植え、収穫、脱穀、貯蔵という営みのなかで、知恵を用いて工夫された様子が良くうかがえる。厨房は、粘土質の土を固めて作られた甕が各家共通に配置され、燃料はマキや枯れ草等が主流である。現代の過剰な生活状況を再考する好機であったが、いずれ消滅していく状況も読み取れた

おわりに

客家民居は、既に珍しい研究対象ではなくなった。様々

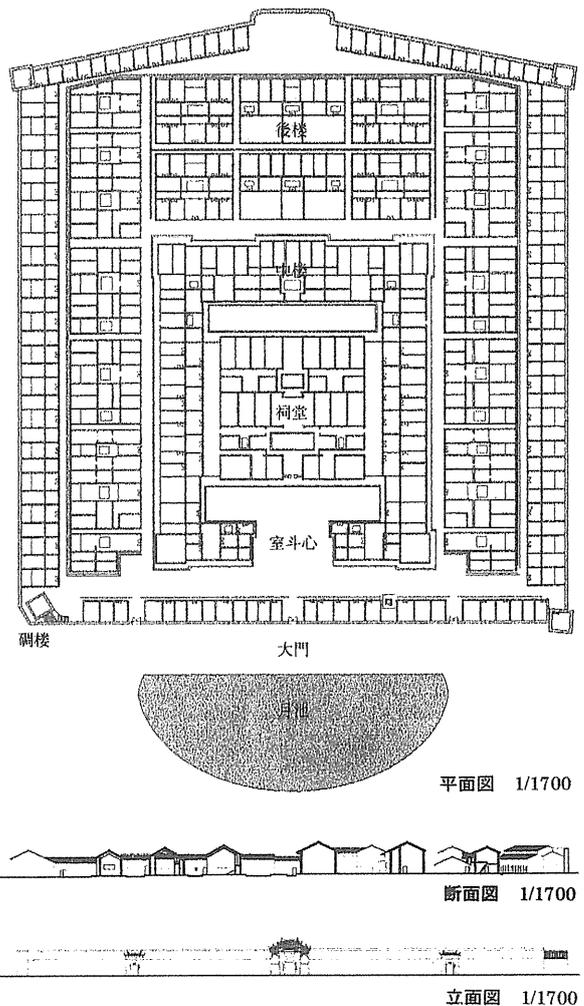


図 5-7 深圳坪山曾氏大万世居

な研究書が出版され、シンポジウムが開かれるなど、中国では典型的な民居の一つとして定着している。けれども皮肉なことに、その自然なあり方や存続が、近年の急激な経済成長を受けて危ぶまれる状態にある。一方、日本では興味本位の紹介が多く、名前の割には実態が知られていない。今回の研究対象地域では、かつて高度経済成長のあおりを受けた日本の伝統的な民家や集落と同じような、いやそれ以上の状態が生じており、その規模と量から保全や保存が危ぶまれる。むしろ“今あることの記録”が最優先であることを報告しておきたい。

<注>

- 1) (財)住宅総合研究「客家の方形・環形土楼について」
- 2) 1999、トヨタ財団助成研究報告、中国南部における客家民居比較研究、東京芸術大学片山研究室編
- 3) 羅香林による客家源流論
- 4) 楚国、春秋戦国時代の国。前 223 年、秦に滅ばされた。
- 5) 中国唐代の反乱
- 6) 1851 年、清朝。中国近代史上最大かつ最長の農民革命。
- 7) 土楼の外壁最上端に設けられた四角い石で作られた小さい部屋。
- 8) 閩西土楼に多く、各界の住戸が廊下で連結する集住形式。

